

原著論文

距離感をもたらす英語表現
——効果的な文法指導法を求めて——

松 本 知 子

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Some Distancing Expressions in English:
Searching for the Effective Grammar Instruction

Tomoko MATSUMOTO

(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

While methodologies to improve communication skills have been widely discussed, little attention has paid to discover effective ways to integrate grammar teaching into communicative English learning. This implies that communication skills can be developed without creating a grammar foundation. Studies done in this fashion not only ignore, but also limit a holistic view of English abilities. Further, these learners learn grammar as only mechanical memorization-centered and drill-based activities. In this study, the author explains the importance of creating effective methodologies for teaching communicative grammar with the purpose of enhancing “communication skills to understand and convey information and ideas *properly*” (emphasis added). The author also demonstrates grammar teaching activities using movies, which can be helpful for learners to foster both their communicative skills and grammatical understanding since they can obtain contextual knowledge. This paper focuses mainly on locating “the core” of past tense form, conveying a sense of distance. Based on this, how to have learners understand the degree of politeness such as the differences between the auxiliary verb *will* and *would* and the construction using the word/phrase *wonder* and *wondered/was wondering* is explored in this paper. Finally, the author introduces a teaching method for subjunctive past using the core.

Key words

communication, grammar, past tense form, a sense of distance, politeness

要 旨

英語のコミュニケーション能力向上のための指導法についてはこれまで多く議論されてきたが、文法指導とコミュニケーション能力を統合する指導法についてはあまり議論されていない。これはコミュニケーション能力が文法の基礎力なして向上することを暗示していると捉えられるかもしれない。また、このような見方で学習をする学習者は、文法学習を機械的な暗記による活動として捉えかねない。本研究は、「情報や考えを理解し、適切に伝えるコミュニケーション能力」の向上を目的とし、効果的なコミュニケーション文法指導法について考察する。さらに、学習者にとって文脈の理解が助けとなる映画を利用した指導法について述べる。具体的には、過去形の「コア」である距離感に焦点をあて、助動詞 *will* と *would* や *wonder* を使った構文と *wondered* や *was wondering* を使った構文の丁寧さの度合いを理解できる方法について言及する。最後に、過去形のコアを活用して仮定法過去の指導法についても述べる。

キーワード

コミュニケーション、文法、過去形、距離感、丁寧さ

はじめに

筆者は現在、コミュニケーション能力を支える文法・語彙指導が実を結ばない現状を改善するため、コミュニケーションに活用できるような新しい文法・語彙指導法—コミュニケーション文法／語彙指導法—の研究をしている。現状として、文法・語彙学習の多くが未だに紋切り型で、1対1対応の暗記活動に依存している傾向が強く、メタ的な言語理解や文法・語彙のコアの理解に繋がっていない。本稿では、英語における動詞の過去形を中心に、田中・佐藤・阿部(2006)や大西・マクベイ(2005)に代表される、その文法形式がもつコア(中心的概念)を生かした指導法について論じていく。具体的には、過去形の表す「距離感」というキーワードをもとに、映画を用いて、動詞の過去形や would や could といった助動詞が婉曲的表現・丁寧表現に使われる感覚を映画における場面と登場人物の関係から捉えられること、さらに発展として、仮定法過去の型「If+主語+過去形～」において、動詞に過去形が用いられる感覚を理解できる、「考えさせるメタ的な言語理解」が可能な文法の段階的な指導法を提案する。以下、第1節では、文法指導の問題点として、特に助動詞 would と仮定法の指導の現状について概観する。第2節で新しいアプローチとしてコミュニケーション文法指導について述べ、第3節でその指導例として、丁寧な意味を持つ過去形と助動詞 will と would と can と could の違い、仮定法を映画の場面を通して学べる例を紹介する。

1. 先行研究

1.1 文法指導における問題点

大西(2014)が指摘しているように、現行の学校教育の中で用いられる標準的な文法説明は数十年前から進んでいないといえる。変わっていない理由が、学生にとって十分に運用できるような完成形が存在しているからであればいいが、現状はそうに楽観視できない。植田

(2011)は、リメディアル教育の視点から、大学生の英語学習意欲の減退調査の結果で、『つまらない難しいクラス』と『文法事項や単語の丸暗記』を意欲減退の上位2つの要因として挙げている。

覚えるべき文法規則の代表として挙げられるものの中に、(1)のような be 動詞の疑問文の作り方が挙げられる。

(1) Are you a Japanese?

↙
You are a Japanese.

(1)のような疑問文を作る際は、通常、be 動詞を文頭に置くと学習する。しかし、その理由や倒置の感覚について説明できる学生はいるのだろうか。

紋切り型の説明や暗記学習に頼ってしまうと、新しい学習指導要領に書かれているような、文法をコミュニケーションに活用することが困難になる。なぜなら、その文法が使われる感覚が理解できないで、新しい文法・語彙は機械的にコミュニケーション活動内で使用されているに留まっている状態でしかなく、活用や実用とは程遠い形でしかないためである。第二の問題点として、学習者が新しい文法規則を学ぶ際、学習者がすでに持っている知識と新たに学んだことを関係づけて考えることができず、別々のものと捉えるため、Nation(2001)がいうところの学習の負担が増大することになる。

文法や語彙の習得にある程度の暗記は必要であることは否めないが、最低限にとどめることはできないのだろうか。また、文法や単語は無味乾燥し、丸暗記するものといったある種固定化した概念を払拭することはできないのだろうか。

1.2 助動詞 would の使用

助動詞 would の使用についてピーターセン(1999)に示唆に富む興味深い指摘がある。そ

れは、「日本人学生の英作文には“would like to～”など、ごく少数の決まり文句をのぞいて、would などの助動詞がほとんど登場しない。」というものである。同様に、樋口（1990）も、would は「仮定法」という言葉に帰されて済まされ、一面的に捉えられることが多いと述べている。英語話者は②のような日常会話で would や could、might を頻繁に使用するにも関わらず、日本の中等教育において、will や can、may に比べて、それらは学習する頻度が少ないため、生の英語に触れて戸惑う文法項目の一つといえる。

(2) A : What is your favorite ice cream ?

B : I would say 31 flavor's vanilla.

また、数年前、ある学生から、will と would について「will は未来形であるのに、なぜ過去形の would が存在するのか」という興味深い質問をもらった。この興味深い質問から端を発し、学生が助動詞 would を使いこなせる効果的な指導法の開発を研究の課題とした。

1.3 仮定法の指導

神本（2006）の調査によると、学生が考える英文法の難易度において、20の文法項目のうち、仮定法過去完了は2位、仮定法過去は6位と上位に位置しており、習得が難しいと考えられていることがわかる。後藤（2012）や中川（2011）が指摘しているとおり、仮定法は構文を公式として無意味的に暗記していることや仮定法が日本語にないことなど、難しいと捉えることには様々な要因があるが、仮定法は日常会話で使われる頻度も高く、とても便利な表現法であるため、効果的な指導法を探る必要がある。

暗記活動に依存した指導をしていれば、「もし～ならば、…だろう」という意味を持つ仮定法過去形において、現在のことを言及しているにも関わらず、なぜ「If + 主語 + 過去形～」と動詞に過去形が用いられるのか、といった疑問

や、It's time you were in bed.（もう寝る時間ですよ。）に見られる仮定法過去形において、これからのことであるのに、なぜ過去形が用いられるのかといった疑問すら起こらないかもしれない。英語を暗記すべきものと言葉ではなく記号のように捉えていては、その感覚どころかコミュニケーションに活用することは到底できないと考えられる。

したがって、学生には難しいと考えられている文法項目で、かつ、日常会話では頻繁に用いられるものをいかにコミュニケーション能力の向上につなげられるように指導していけるかが鍵となる。

2. 文法指導に対する新たなアプローチ

前述したように、数十年前から変わっていない傾向が顕著な文法指導に新たなアプローチが必要であることは否めない。そのアプローチのヒントを英語リメディアル教育の知見から得ることができる。

現在、日本全国の多くの大学において英語リメディアル教育が実施されている。英語リメディアル教育は、中高の補完的な教育と位置付けられており、様々な英語教材の開発が進められているものの、それらの教材を用いても中高で学生が受けてきた授業を繰り返すだけでは学習意欲の向上につながるとは考えられない。小野（2005）がリメディアル教育で成果を上げる鍵として挙げている「新鮮な学習方法」の確立が文法・語彙指導においても求められていると考える。また、渡部（2008）が述べているように、眠っている知識を活性化させるリメディアル教育が文法指導にも有効であると捉える。なぜなら、丸暗記でなく持っている知識を用いることで理解度が増し、Nation（2001）が指摘するように、学習者の負担を減らせるためである。

このような英語リメディアル教育の知見から得た新たなアプローチをコミュニケーション文法指導に取り入れることにする。

2.1 コミュニカティブ文法指導

大学生の英文法力は自信度と理解度の低下が報告されているだけではなく、前置詞、現在完了、現在分詞、不定詞、仮定法過去完了、そして分詞構文といった文法項目の理解の低下が確認されているが、これらは決して難易度の高い文法項目ではないことに留意すべきだ。これは暗記に依存し、活用する機会が限られていたことが一つの要因として考えられる。暗記学習では、英語のメタ認知能力が向上されず、理解の定着が困難であるだけではなく、コミュニケーションに重要なニュアンスの差を把握することも不可能である。例えば、現在完了が使用された表現は単純過去とは異なるニュアンスを伝えているわけであり、そのニュアンスが理解できなければ、正確なコミュニケーションが可能になるわけがない。他の例として、「Would you help me?」は「Will you help me?」と比べより丁寧な依頼表現であることは多くの学習者が理解しているだろう。しかし、より丁寧な依頼表現になる理由を理解している学習者は少ないだろう。またその理解をコミュニケーション力育成に繋げている学習者も少ないだろう。このような依頼表現をコミュニケーション活動で機械的に使用したとしても、他の文法事項（たとえば「I was wondering～」がなぜ過去形なのか）という理解が定着することもなく、「I was wondering～」と「I wonder～」のニュアンスの差を使い分けるといったコミュニケーション能力の強化にも繋がることはない。しかし、また逆に、コミュニケーション活動ではこのようなニュアンスの差を教授することは困難であり、メタ認知能力を向上させ、文法・語彙指導とコミュニケーション能力向上のための活動とが結びつくような、コミュニケーション的な文法・語彙指導の開発が必要となる。

このような過去形と現在完了形や will と would などのニュアンスの差を感覚としてつかむため、さらには、コミュニケーションに活用できる文法の基礎を築くためには、従来のような型には

まった指導ではなく、その単語や文法がもつコアの理解が欠かせない。例として、先ほどのピーターセン (1999) の would についての指摘は、そのコアを日本人が十分に把握していないために、「I would like to～」以外にあまり would を使用した表現を用いないといえる。

2.2 過去形に対する学生の理解

(3)のような過去形が使われた文に対して学生はどのような感覚を持っているのだろうか。

(3) I played baseball yesterday.

多くの学生が過去形は物事が過去に起こったことを意味すると答え、それ以上の答えの余地はないものと考えよう。では、will の過去形の would についてその説明が成り立つだろうか。まず、助動詞 would を使った表現で学生が思いつくものとして、先ほどのピーターセン (1999) の指摘にあったように、「would like to～」が挙げられる。また、丁寧な依頼表現の「Would you～?」も思い浮かぶだろう。前者については「want to～」の丁寧な表現で、後者については「Will you～?」よりも丁寧な表現として認識している。つまり、ピーターセン (1999) も指摘しているように、would を使うと丁寧な表現になるという知識を持っている学生は多い。では、果たしてその理由を説明できたり、would と(3)の動詞の過去形を関連付けて考えたりする学生はいるのだろうか。勿論、丁寧に「～したい」と言いたい時は、「would like to～」を、丁寧な依頼をする時には「Would you～?」を使えばいいといえどもそれまでだが、それだけでは前述の(2)の would の感覚を理解するのは難しいと考えられる。

また、「want to～」については、その過去形「I (just) wanted to～」が「～したかった」という意味以外に「～したい」という気持ちを「want to～」よりも丁寧に表現できる用法がある。これについては、学校文法で特段習得すべ

き項目として挙げられないが、日常会話では頻繁に耳にする。

さらに、丁寧さといえば、TOEIC 対策の授業、ビジネス英語の授業において、覚えておくべき項目の上位に上げられる「I wondered/was wondering if～」についても過去形や過去進行形が使われる所以について説明できる学生は少ないだろう。前述した仮定法過去形において現実の事柄を表現するにも関わらず過去形が用いられる理由についても同様である。

このように、過去形、助動詞、丁寧表現、仮定法と、紋切り型の文法指導では一見するとこれらは別々の事象のように捉えられる。紋切り型や暗記型の学習では、これらの文法項目同士の関連性に焦点が置かれられないため、メタ的な言語理解や文法・語彙のコアの理解には至らない。したがって、覚えるべき項目も増え、応用が効かず、もったいないことに、実用力養成、さらにはコミュニケーション能力育成との繋がりが薄くなってしまうと想定される。

3. 過去形の文法指導

過去形について学生が持っている知識、眠っている知識を活性化させながら、過去形が使われる感覚、現在形とのニュアンスの違いを理解できる指導法とはどのようなものだろうか。また、紋切り型の指導ではなしえない過去形の助動詞や丁寧表現、さらには仮定法過去まで関連づけられる指導法とはどのようなものだろうか。

まずは、動詞の過去形が用いられる基礎となり、中学校1年生で習う(4)の2文の感覚の違いを学生に質問し、学生が持っている知識を活性化することから始める。

- (4) I play baseball.
I played baseball yesterday.

(4)の2文について学生は、現在形の場合は習慣を表し、過去形の場合は「昨日野球をしました。」という過去の事実を述べることは理解できる。

ここで、過去形のコアは Langacker (1978, 1991) の言葉を借りて、「一種の距離感」であることを下記のイメージをもとに理解してもらう。

- (5) 「距離感」→ 現在からの距離感

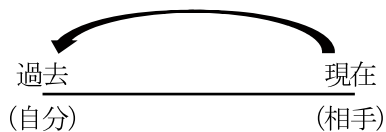


次に、助動詞の will と would に関しては、(4)の時と同様に、まずは学生の will と would に関する知識を問うことから始める。学生の持っている知識を活性化させながら、will が元々 wish と同じ意味を持つ動詞であったことに着目させ、「～したい」という意志を表すことから、未来を表す助動詞というイメージが持たれるようになったといった元々の意味、語源を理解してもらう。そこから、will と would の感覚の違いに話を進めていく。先ほど述べた学生からの「will は未来形であるのに、なぜ過去形の would が存在するのか」という質問についても、下記の例を挙げて、その感覚の違いを理解してもらう。

- (6) a. I like to write to you.
b. I will like to write to you.
c. I would like to write to you.

「would like to～」は「～したい」という意味を持ち、「want to～」よりも丁寧な表現としてのみ認識していたら、(6)の3文の違い、さらには「will like to～」という表現の存在にも目が向かないだろう。実際、「would like to～」は British National Corpus において4052例存在するのに対して、「will like to～」は4例しかないことから、使われることは極めてまれではある。そこに、will と would の感覚の違いを読み取ることができる。will は強い意志を表すため、話す相手がいるとなると、とても強く直接的な表現になってしまう。ここで、前述の過去形のコア「一種の距離感」に着目する。

(7) 「距離感」→ 相手（人）との距離感



(6c)は would を使用することにより、(7)のように、現在の地点にいる相手と距離を保つことができる。つまり、相手との距離を保て、相手に対してより無礼でない表現にするために、(6)では will でなく would の方が使われるのである。学生の will と would の質問に対しても、過去形がもたらす距離感をキーワードにそのニュアンスの違いを理解してもらう。can と could、may と might についても同様である。

ここで、この過去形がもたらす距離感に付随するイメージについても、学生を2人立たせて近づいた状態で立っている時と離れている状態で立っている時でどのような違いがあるかを体感させてもよい。そして、二者が離れることで、ぼやけていくイメージ、あいまいになるイメージを認識してもらう。そして、それが過去形のイメージであることを改めて確認してもらう。

次に「I just wanted to～」のような動詞の過去形が「I just want to～」と丁寧さという点で感覚が異なる点についても、まずは、学生がすでに持っている知識である字義通りの日本語訳「ただ～したかった。」と「ただ～したい。」を意識してもらう。その後、スヌーピーで有名な『ピーナッツ』の漫画の一場面における「I just wanted to～」の使用例を用いて(7)のような感覚を理解してもらう。(8)はチャーリー・ブラウンがシャツを買いに店に行き、店員と話しながらシャツを選んでいる場面である。

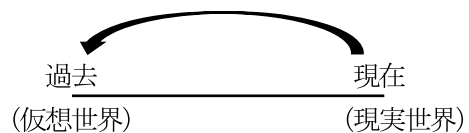
- (8) ① Sorry, ma'am. This is a nice color, but I think I need a larger size.
 ② What am I staring at ?
 ③ I just wanted to watch you put all the pins back in that shirt.

(8)の③の日本語訳の例として「シャツにピンを全部元通りに刺すのを見たいと思って。」が考えられる。日本語訳からもわかるとおり、今現在のチャーリー・ブラウンの心境を過去形で表現している理由を過去形のコアと先ほどの will と would の違いをヒントに考えてもらう。また、話している相手が友達でなく店員である点にも注目してもらう。

さらに、過去形がもたらす距離感の感覚をより確実なものにするために、「I wonder～」と「I wondered/was wondering～」における距離感・丁寧さの違いも取り上げる。will と would の感覚を理解した時と同様に、まずは動詞 wonder についての背景知識を活性化させた上で、映画に出てくる実例を用いてその使われる感覚を理解してもらう。

さらに発展としての仮定法過去の型「If + 主語 + 過去形～」についても映画を用いた指導法を後述するが、この型における過去形のもたらす距離感は端的に示すと下記のようなものになる。

(9) 「距離感」→ 現実との距離感



現実世界と仮想世界との距離感という意味では、(5)と(7)から少し発想の転換が必要な分、難易度は上がるかもしれないが、澤田 (2002) の言葉を借りるなら、仮定法は決してみにくいアヒルの子ではなく、(5)や(7)と同様に、距離感という観点でとらえられるのである。

3.1 映画を使用する意義と使用した映画

本研究では、映画を用いることで、学習者が過去形の使われる感覚、コアをより鮮明に理解できるようになるのではないかと考えた。具体的には、過去形と現在形の感覚の違いや丁寧度を映画の場面を通して見て学ぶことで、登場人

物の心理もわかり、コミュニケーションにより活用しやすい指導になると考えた。そこで、このような指導を可能とするために、本稿では、映画『ノッティング・ヒルの恋人』、『ブラダを着た悪魔』、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』と『ニューヨークの恋人』を使用した指導法について述べていく。

今回、この4つの映画を使用した理由は、決して学習者の認知度が高く、登場人物や選定した場面の説明などに時間をかける必要がないといった指導上の便宜性によるものだけではない。『ノッティング・ヒルの恋人』については、登場人物の男性が控えめな性格で、過去形を含む丁寧な表現を多用するから使用した。『ブラダを着た悪魔』については、wonder が多く使われているため、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』については、助動詞の can と could の感覚の違いを読み取れる場面があるため使用した。『ニューヨークの恋人』については、過去形を用いた丁寧な表現がある一場面が多く出てきて、指導の集大成として利用できると考えたためである。

3.2 丁寧さを表す動詞の過去形の指導法

(8)で「I (just) wanted to～」の感覚を味わってもらった後にその理解をより確実なものにするために、映画『ノッティング・ヒルの恋人』の一場面でその表現の持つ感覚を理解してもらう。下記の場面は、一般人のウィリアムが世界的に有名なハリウッド映画スターのアナとデートに出かけた場面で、アナについて失礼な話をしているグループの人たちに対して、ウィリアムが一言注意をしに行った場面である。アナは身を伏せていたが、最後に我慢できず話をしにいく時に「I just wanted to～」を用いている。このセリフに対する日本語字幕は「彼のこと謝るわ。デリケートなの」となっており、友達(ウィリアム)に対して謝りたいという現在の心境を表しているのにも関わらず過去形が用いられていることに着目する。そして、なぜ過去形が用いられているのかについても考えてもら

う。ここでは、アナの悪い噂話をしている人達はアナにとっては初対面の相手であるので、過去形を用いることで少し距離感を保っていると考えられる。

(10)

WILLIAM: Uh, sorry...sorry to disturb you guys, but...um...

LAWRENCE: Can I help?

WILLIAM: Well, yeah, I wish I hadn't overheard your conversation...but I did and...um, I just think, you know, the person you're talking about is a real person and I think she probably deserves a little more consideration, rather than having jerks like you drooling over her...

LAWRENCE: Oh, sod off, mate. What are you, her dad?

WILLIAM: I'm sorry.

ANNA: No, no, I love that you tried...time was I'd have done the same thing. In fact...

ANNA: Hi.

LAWRENCE: Oh, my God.

ANNA: I just wanted to apologize for my friend. He's very sensitive.

LAWRENCE: No, look, I'm sorry...

このように、映画を用いて英語の感覚をつかんでもらう際、学生ならこのような場面でどのような英語を発するかについても考えさせて、より自分に身近なものとして認識してもらってもよいと思われる。

次に、「I wonder～」と「I wondered/was wondering～」については、映画『ブラダを着た悪魔』を使用して、その感覚を味わってもらう。1つ目の場面は、一流ファッション雑誌の編集長ミランダが、モデルのギネスが出産後に「やせたかしらね」と部下に発した台詞である。この発話には状況から「やせておいた方がいい」という含みすら感じられる。この感覚を味わ

てもらった後に、この「I wonder～」を「I was wondering～」や「I wondered～」と過去形にかえたらどのようなニュアンスになるのかを学生に考えてもらう。そして、過去形にすることで(7)のような相手との距離感が生まれ、嫌味がなくなり上記の含みがなくなることを味わってもらう。

(11)

MIRANDA: Tell Simone I'm not going to approve that girl she sent me for the Brazilian layout. I asked for clean, athletic, smiley. She sent dirty, tired and paunchy... Also, I need to see all the things that Nigel has pulled for Gwyneth's second cover try. I wonder if she's lost any of that weight yet. Who is that?

さらに同じ映画の下記の場面で使われている「I was wondering～」の感覚も味わってもらう。

(12)

ANDY

The thing is, I have all these clothes from Paris, and I don't have any place to wear them. So... I was wondering if you could take them off my hands.

EMILY

Well, I don't know.

この場面では、現在形が多く使われている中、過去進行形の「I was wondering～」が発せられている。パリで買った服をもらってくれるかとエミリーに聞く場面である。アンディとエミリーは友達でなく、元仕事の同僚である。「I was wondering～」の日本語字幕は「もらってくれないかしら」となっている。ここでも「I wonder～」とした場合との感覚の違いを味わってもらう。過去進行形にすることで、現在形の直接的

なニュアンスがなくなり、相手と一步距離を置き、若干のためらいの気持ちを含めた依頼の意味になることを場面から味わってもらう。

ためらいという点については、映画『ノッティング・ヒルの恋人』の下記の場面からも「I was wondering～」のためらいの感覚がうかがえる。

(13)

WILLIAM: So, uh... Uh, I'll just fire away, shall I?... Right. Ahm...the film's great... and, um, I just was wondering...whether you ever thought of having, um, more, uh, horses in it?

この場面は、ウィリアムが突然アナに対して映画についてのインタビューをしないといけなくなり、映画を見てもいないウィリアムが当惑して質問している場面である。(11)も(12)もためらいから「I was wondering」の前後に間があり、その様子からも過去形を用いることでその気持ちを表せる感覚がつかめる。

最後に、丁寧さを生み出せる過去形の感覚が理解できる場面の集大成として、映画『ニューヨークの恋人』の一場面を使用する。チャーリーという男性がパトリスという女性を電話でデートに誘う場面である。

(14)

Charlie: Hey, Patrice? Hi. It's me, Charlie.

Patrice: Hey, Charlie.

Charlie: I was just calling to find out if you got my flowers... your flowers. I was calling to see if you got the flowers I sent you. I was just wondering if you would like to go to a movie tonight and maybe afterwards perhaps accompany me to dinner? I mean...I understand completely if you're otherwise engaged. But, uh, you know, I just wanted to say that, um... I wanted to say that you've, uh... You've

made an impression on me.

この場面におけるチャーリーの気持ちは、表情からとまどいやためらい、相手に対する配慮、丁寧さがあることが読み取れる。つまり、現在形を使って距離を置かない気持ちにはなれないのである。学生には、自分がデートに誘う場面を想定してもらい、とまどいやためらいの気持ちを意識しながら、過去形の感覚を理解してもらう。

3.3 助動詞 will/would と can/could の指導法

助動詞 will と would、can と could の感覚の違いに関しては、映画『ノッティング・ヒルの恋人』と『ハリー・ポッターと秘密の部屋』のを用いてその感覚を味わってもらう。

まずは、下記の『ノッティング・ヒルの恋人』の一場面から、would の感覚を理解してもらう。アナがマスコミから逃れるために、ウィリアムの家に来た際に、ウィリアムがアナに優しく話しかける場面である。

(15)

William: Don't think about it. We'll sort it out. Now what would you like, tea, bath?
Anna: A bath would be great.

この場面では、ウィリアムも would を使って丁寧にアナに「何がいいかな？紅茶？お風呂？」と質問している。この時、ウィリアムは「What do you want?」と聞いていない。この理由についても文脈から過去形、ここでは「would like」を用いて、距離感を保った方がいいことを理解できる。ウィリアムの提案に対して、アナも「もしよろしければ」という遠慮の気持ちで would を使用して「お風呂がいいわ」と言っているのである。ここで will を使うと、意志を直接的に表してしまうので、この場面にふさわしくないことが場面の雰囲気からもわかる。

次に、can と could に関しては、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』を使用して、その感覚を味わってもらう。下記の場面はハリーとバーノンおじさんがハリーの鳥について話をしている場面である。

(16)

UNCLE VERNON: I'm warning you, if you can't control that bloody bird it'll have to go!

HARRY: But she's bored! If I could only let out for an hour or two.

ここで、なぜバーノンおじさんが can't を用いて、ハリーが could を用いているのかを学生に考えてもらう。バーノンおじさんの怒りを表現するためには、現実的認識を投影する can't がふさわしく、一方、ハリーは、鳥を1～2時間離せる可能性の低さ、控えめさを提示していることを場面と2人の関係から理解してもらう。

3.4 仮定法過去形の指導法

最後に、仮定法過去形については、それが多く使われている『ノッティング・ヒルの恋人』を用いてその感覚を味わってもらう。そして、澤田(2002)や中川(2011)が指摘しているように、仮定法は状況を仮想世界にあるものとして述べるための形式で、話者の心的距離感を提示できることを実感してもらう。下記の場面は、旅行書専門の書店を営むウィリアムが、防犯カメラで本を万引きする男を発見し、話をする場面である。

(17)

William (以下 [W]): We've got a security camera in this bit of the shop.

Thief (以下 [T]): So?

W: So, I saw you put that book down your trousers.

T: I don't have a book down my trousers.

W: Right. I tell you what. I'll call the police and what can I say, ① if I'm wrong about the whole book down the trousers scenario, I really apologize.

T: OK. ② What if I did have a book down my trousers?

W: Well, ideally, ③ when I went back to the desk, you'd remove the Cadogan Guide to Bali from your trousers, and either wipe it and put it back or buy it.

①の発話では if の後に現在形が用いられ、②の発話では過去形が用いられていることに着目してもらう。そして、その理由を状況から考えてもらう。2人は店員と客という関係で、店員の間違いで男がもし万引きしていなかったら、責任を取らないといけなくなるため、①では間違っている可能性があることを現実的認識として提示している。②は万引き犯の心境から、本を盗んでいることを明らかにされたくはないので、過去形を用いてその可能性の低さ、非現実的であることを提示しているのである。これらのことを、学生には店員と万引き犯になったつもりで心境を考えてもらいながら、英語表現を味わってもらう。そして、③では、綿貫・ピーターセン(2011)が述べているように、when は if に書き換え可能だとした上で、これからデスクに戻るという状況であるのに過去形の went が使われている理由について、ウィリアムの心境を捉えながら考えてもらう。そして、仮定法で万引きしていない可能性が低い意味合いをあえてこめて、店員として配慮していることを感じてもらう。そして、現在形との違いについても言及し、映画の場面と仮定法で過去形が使われる意義である(9)の理解のもと、仮定法は話者の気持ちさが投影されている便利な表現法の一つであることを認識してもらう。

4. おわりに

本稿では、過去形のコアである「距離感」を

もとに、丁寧な意味を持つ過去形の感覚や仮定法過去の話者の微妙な心的態度を映画の台詞とその場面から読み取る文法指導の可能性について述べた。コミュニケーションを支える文法学習とは本稿で述べたような取り組みに学習者が参加することによって成り立つ。決して表面上の意味や型にはまった機能のみを学ぶのではなく、(17)に代表されるような話し手の些細な心理が現れている例を取り上げ、過去形のコアや性質について学ぶ機会を提示することにより、それを使う感覚を疑似体験でき、コミュニケーション能力の育成と文法学習とが融合した包括的な英語学習を提供できることが可能になると考える。

今後の課題として、神本(2006)の調査で、学生が考える英文法難易度が2位の仮定法過去完了形を仮定法過去よりも心的距離が大きくなるという視点で捉え、下記の『アナと雪の女王』で使われているような仮定法過去と仮定法過去完了の混合型も存在すること、そしてその感覚も味わえるような指導をすることが挙げられる。

(18)

Hance: I'd like to formally apologize for hitting the Princess of Arendelle with my horse. ... and for every moment after.

Anna: No. No-no. It's fine. I'm not THAT Princess. I mean, if you'd hit my sister Elsa, that would be—yeash! 'Cuz, you know...

また、他にも英文法の難易度の上位に挙がるような、例えば、分詞構文についても、なぜ接続詞と主語が省略されるのか、そこにどのような物語が存在しているのかについて考え、その感覚についての理解を深めてもらう指導法の研究を行う予定である。

そして、最終的には、例えば、疑問文と倒置など、違う文法項目として扱われがちな項目でもそこにひそむ物語や心理が共通するものを関

連付けてとらえ、その使われる感覚を理解できる段階的な指導法の研究を行う。

付 記

映画を利用したコミュニケーション文法・語彙指導法について、熊本大学の平野順也氏と研究を進めており、今後様々な文法項目を扱う計画である。

参考文献

- Langacker, R. (1978) 'The form and meaning of the English auxiliary.' *Language*, 54, PP.853-882.
- Langacker, R. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press. [cited as FCG2]
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 植田麻実 (2011) 「リメディアルの視点から—大学生の英語学習意欲減退調査と学習者自律へのニーズ分析」『科学研究費補助金研究成果報告』.
- 大西泰斗・ポール・マクベイ (2005) 『みるみる身につく！ イメージ英語革命』東京：講談社.
- 大西泰斗 (2014) 「文法指導の勘所」『英語教育』大修館書店, 第63巻第9号, 10-12頁.
- 小野博 (2005) 「日本リメディアル教育学会第1回全国大会の開催によせて」, 『日本リメディアル教育学会第1回全国大会講演資料集』.
- 神本忠光 (2006) 「高校の『ゆとり教育』で大学生の英文法力がどう変化したか—10年前との比較—」『熊本学園大学文学・言語学論集』, 第13巻第2号, 1-29頁.
- 後藤由香 (2012) 「仮定法を学習する難しさと効果的な学習援助方法の検討」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』, 第19号, 13-24頁.
- 小中秀彦 (2012) 『Fun English with SNOOPY スヌーピーと楽しく学ぶ基礎英語』東京：センゲージラーニング.
- 澤田治美 (2002) 「時制と仮定法は別物—仮定的条件文を中心として」『英語教育』, 第7号, 24-27頁.

田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』東京：大修館書店.

中川右也 (2011) 「仮定法再考」『米子工業高等専門学校研究報告』, 第46号, 1-7頁.

樋口万里子 (1990) 「仮定法に関わる形式の Free Thought Space Builder としての意味機能」『九州工業大学情報工学部紀要. 人文・社会科学篇』第3号, 135-163頁.

マーク・ピーターセン (1999) 『日本人の英語』東京：岩波書店.

渡部友子 (2008) 「「中学・高校のやり直し」でないレメディアル教育—本学での英語教育の実践から—」『富山県立大学紀要』, 第18巻, 57-66頁.

綿貫陽・マーク・ピーターセン (2011) 『表現のための実践ロイヤル英文法』. 東京：旺文社.

コーパス

British National Corpus

<http://www.natcorp.ox.ac.uk/> (2016年11月1日閲覧)

DVD

Cathy, K. (Producer), & James, M. (Director). (2001). *Kate & Leopold* [Motion Picture]. United States: Miramax Films.

Duncan, K. (Producer), & Michell, R. (Director). (1999). *Notting Hill* [Motion Picture]. United Kingdom: Universal Pictures.

Heyman, D. (Producer), & Columbus, C. (Director). (2002). *Harry Potter and the chamber of secrets* [Motion Picture]. United States: Warner Bros Pictures.

Peter, D. V. (Producer), & Buck, C. and Lee, J. (Directors). (2013). *Frozen* [Motion Picture]. United States: Walt Disney Pictures.

Wendy, F. (Producer), & David, F. (Director). (2013). *The Devil Wears Prada* [Motion Picture]. United States: 20th Century Fox.